

ボールあそびの集い

団体名●丸井ゼミナール／代表者名●倉町龍世（人間学部こども学科3年）

はじめに

近年、インターネットや電子機器の普及により、子どもたちの遊びの形は、オンラインゲームやスマホゲームなど室内遊びが多くなってきている傾向が見られる。それに伴い、運動能力の低下や、仲間と一緒に運動する機会が減っている。そこで我々は、発育・発達が著しい時期である子どもたちに、多種多様な「ボール遊び」を通じて、学びや成長を促すと同時に、体を動かすこと、スポーツをすることの楽しさや魅力を感じてもらうため、運動の習慣作りの一つの方法として、定期的に遊びの場を設ける活動を行った。

活動内容

本学のハンドボール部の協力を得ながら、週に一回の活動を行った。その日に行くことを具体的に学生側があらかじめ決めて行くのではなく、その場で子どもたちに何をしたいのかを聞き、一緒に活動を形作っていくことを軸として活動を行った。準備運動では、その日に行く活動に適した動作を、ボールを使って一人もしくはペアで行った。ドッチボールなどのチーム別や全体で行う遊びから、子どもたちからの要望が多ければ鬼ごっこや「だるまさんが転んだ」など、ボールを使うことにとらわれず、多種多様な運動を通して、新たな発見や学びを感じることができる場を作ることを常に意識していた。

また、複数人で遊ぶことで、周りの人のことを考える協調性などを感じることができ、楽しさだけでな

く、人としての成長を、スポーツを通して感じてもらえるよう活動を行った。

成果、結果の考察

最初は、「聞かせ方」が身に付いておらず、指示がなかなか通らないことが多々あり、子どもと学生、お互いが満足のいく活動をするのが難しかった。しかし、回を重ねながら、どうすればより充実した活動にしていけるのかを考え、実行していくことで、次第に子どもたちに満足してもらえる時間が多くなっていったように感じている。

複数の学校から、普段は関わりのない子たちが一緒に活動するため、その分団体意識が薄く、統率を取りにくかったものの、その分子どもたち自身が周りを見て動く姿勢が見られることがあり、運動における能力面だけでなく、人としての成長を垣間見ることができたと感じている。

今後の課題、展望

その場で子どもたちに何をしたいかを聞いて活動を行っていることで、どうしても毎回活動内容に偏りが出てしまうことが多く見受けられたため、ある程度子どもたちからの意見を予測したうえでの工夫を考えたり、子どもの興味を引きやすい準備運動を考えたりするなどの試行錯誤を行っていきたい。

また、この活動の目的の一つでもある運動の習慣化を勧めていくためにも、継続的に運動の出来る場の提供を行っていきたい。



図1 準備運動の様子



図2 ドッチボールをしている様子